

ながくつかうこと

ー 防火建築帯の再編ー

Keywords

防火建築帯 シッター街 老朽化
ホームシェア リノベーション メンテナンス

DZ21116

寺奥 莉央



1. はじめに

1.1 研究背景

「ながく使うこと」は良いことと言われることがしばしばあるが、具体的にどのような方法で、どのような効果をもたらすのか興味を持った。そこで今回の設計では、建築という媒体を通して、「ながく使うこと」について研究することにした。

昨今、建築業界においてもスクラップアンドビルドが問題となり、空き家のストック活用やリノベーションなどが注目されている。このような問題を解決するべく、ながく使うことの恩恵を探ることとする。

2. 敷地概要

2.1 敷地選定

建築業界において「ながく使う」アプローチのひとつに、近代建築の保存活動を行っているDOCOMOMOという団体があり、その活動について調べることにした。登録リストを見てみると、「沼津市本通防火建築帯」(図1)に興味を惹かれた。なぜなら、私は沼津市で生まれ、幼いころに見たことのある何の変哲もないこの商店街が、なぜ選定されているのか気になったからだ。沼津市本通防火建築帯、通称「アーケード名店街」は商店街としての機能だけでなく、防火帯としての機能や戦災復興のための住居としての役割も担っており、その価値を継承するため選定された。しかし、建物の老朽化による耐震性の低下や、商店街の衰退などを理由に再開発が進められている。DOCOMOMOに認定されたのに関わらず、解体されてしまうこのアーケード名店街を舞台に「ながく使う」方法を探る。



図1 沼津市本通防火建築帯(通称アーケード名店街)

2.2 アーケード名店街

防火建築帯とは、木造建築が多く、空襲による火災が頻繁に発生した時代背景から、戦災復興を進めるとともに都市の防災性を向上させるため、鉄筋コンクリートを用いて火災の延焼を防ぐために設計された建築帯のことだ。このアーケード名店街は、全国に展開された都市不燃化運動の先駆けとして誕生した。一階は商店、二、三階は住宅であり、二階以上が歩道上に突出しているという特徴があるため、沼津の一名所となった。

3. 現状分析

3.1 再開発事業

現在では、増築された部分も一部あるが、統一感のあるファサードなど、多くの旧態を残している。しかし、シャッターを降ろす店も増え、建物の老朽化も進んでいることから、大型マンションなどを含む再開発事業が進められている。¹⁾しかし、景観を大きく損なうなどの理由から、計画は難航したため、合意が取れたE-1街区(図2)から再開発を始めることとなった。今回の設計では、実際に解体が始まったE-1街区を対象敷地として、街並みや風景を残しながら使う方法を考える。

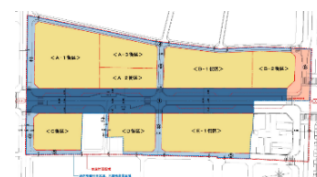


図2 再開発における街区²⁾

3.2 シャッター街と空き家

また、住宅部分からも人の気配は感じられず、実際に空き家も増えている。この建物は、共同住宅という形式で、一つずつの家が連なることで、一つの構造として成立している。そのため、空き家や空きテナントが生まれても、住宅と商店の両方に入居する人はなかなか見つからず、そのまま放置されてしまうことがしばしばあった。

3.3 老朽化

住宅の内部には、躯体にひび割れが生じていたり(図3)、床が抜けていたり、塗装がはがれていたりする部分(図4)も見られた。これまで大事にされてきた様子を感じた一方で、手を加えている部分が少ないため、老朽化や耐震性の低下が問題になってしまったのではないかと感じた。



図3 コンクリートのひび割れの様子 図4 塗装がはがれている様子

3.4 オモテとウラ

商店街に面する特徴的な統一感のあるファサードとは対照的(図5)に、裏側は他の住宅との間を埋めるように増築した痕跡(図6)がみられる。建設当初に行われた区画整理により、RCの整った外観であったが、時代の流れに伴い、他の住宅との余白を埋めるように、木造で商店のための倉庫や住居が増築されていき、現在のような外観となった。一見、商店街に面するファサードがオモテと思われるが、足りないものを足していくという人間的な営みが溢れ出している、ウラが住人にとってはオモテであったように感じた。



図5 オモテの様子

図6 ウラの様子

4. 問題提起

変化を受け入れず、新しいものの入り込む余地がないことが、ながく使うことを妨げることになってしまった。ながく使おうとするあまり、RCの躯体に手を加えないまま放置され、老朽化が進んでしまい、結果として解体されることとなった。また、個人の所有物である可変性のない住宅と商店が、新しい住まい手を見つけることの妨げになり、現在所有しているのは建設当初から住んでいる高齢者がほとんどとなってしまった。

5. 提案

新しいものと古いものの交わりでながく使うことを実現する。変化を許容し、新しいものを受け入れ、循環することこそが、長い目で見ると、ながく使うことにつながると考える。

(1)用途計画

住宅部分は、地域の高齢者と一人暮らしを始める学生の共同住宅とする。学生が高齢者を支えるだけでなく、一人暮らしに不安を抱える学生を高齢者が見守る。空きテナント部分には医療福祉施設を誘致することで、現在の住民の多くである高齢者の支援をする。これにより、近隣の学生が働く場所となり、高齢者に見守られながら、現場経験を積むことができる。お互いに支えあう暮らし方によって、住み続けたいと感じ、ながく使うことにつながる。

(2)建築計画

RCの耐久年数の長さ、木造の使い手に合わせた可変性の高さの相互作用で、ながく使うことにつながる。住民や店主、地域の人々が建物の維持をすることで、コミュニケーションの場となり、この防火建築帯の歴史を継承する場になる。構造面に関しては、既存のRCの躯体を新たなCLTやLVLの木質材料や木造で補強することで耐震性能を確保する。

7. おわりに

このように建物の必要な部分を残し、町並みや風景を継承することで、住民や地域の人々の急激な変化に対する抵抗を軽減し地域文化を継承することにつながる。また、それだけではなく、必要に応じて手を加え続けることで、古いものと新しいものの相互作用が起こり、お互いが支えあうことこそが「ながく使うこと」につながる。以前は防火帯として地域の人々の心の拠り所であったこの建築が、時を越えて人々をつなぎ、帰りたいと思える故郷のような、拠り所になるのではないだろうか。

参考文献

- 1) 朝日新聞デジタル「静岡沼津のアーケード名店街 再開発本格始動へ 2029年に新ビル」2024年3月28日掲載

<https://www.asahi.com/articles/ASS3W7VFWS3VUTPB017.html?mssockid=08ad0a0d8c106ed831a91e698d6c6f39>

- 2) 町方町・通横町第一地区市街地再開発組合再開発 「(仮称)町方町・通横町地区第一種市街地再開発事業 基本計画案【ダイジェスト版】」 2014年5月21日掲載

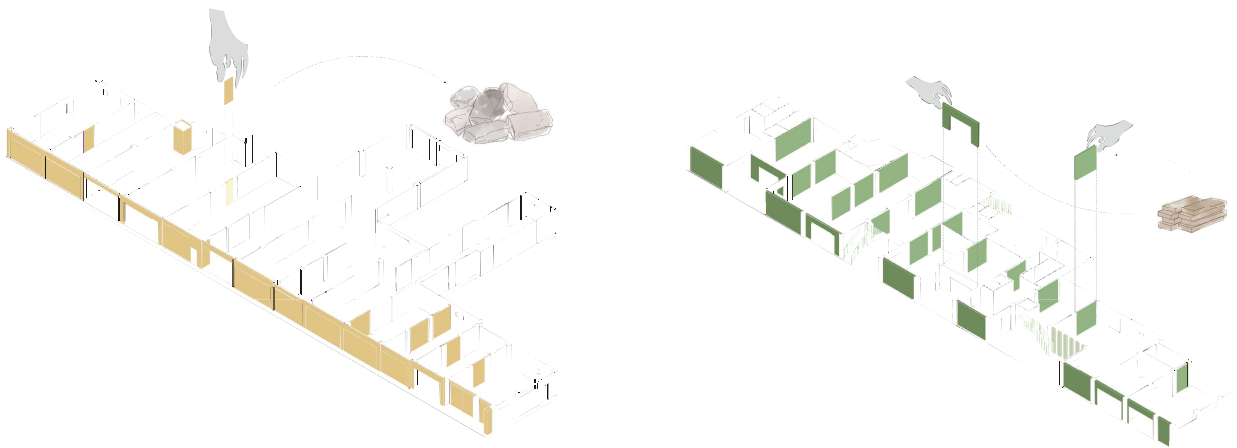
<http://www.nposidam.org/lsc-numazu/koubo/soan.pdf>

「ながく使うこと」がどのような手段でどのような効果をもたらすのか興味を持った。昨今、スクラップアンドビルドが問題となり、空き家のストック活用やリノベーションなどが注目されている。このような問題を解決するべく、ながく使うことの恩恵を探ることとする。沼津市本通防火建築帯を対象にリノベーションを行い、複数の木材を用いたシェアハウス型住宅を提案し耐震性能の向上と地域の人々の交流の拠点としての可能性の創出を図る。

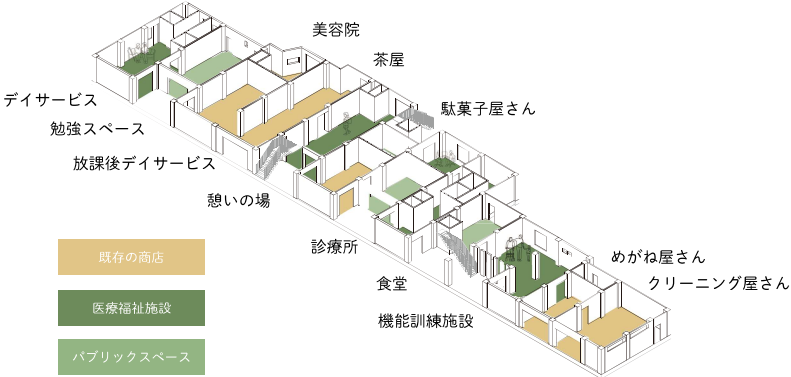
ながくつかうこと - 沼津防火建築帯の再編 -

DZ21116 寺奥莉央

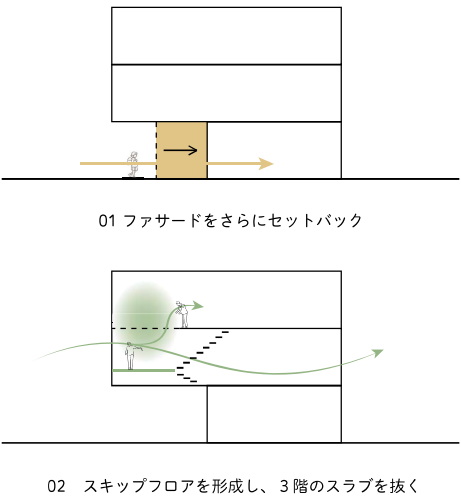
01. 構造ダイアグラム



02. 機能配置



03. 断面ダイアグラム



AA' 断面図 S=1/200